

室井尚×吉岡洋 連続講座

哲学とアートのための

12の対話 — 「現代」を問う

テーマ  
② 「人新世」じんしんせいなんてあるのか？



---

## 第2回 「人新世」<sup>じんしんせい</sup> なんてあるのか？

---

吉岡 洋（進行 安藤泰彦）

安藤 時間になりましたので、「哲学とアートのための12の対話——現代を問う」を開催したいと思います。今回は第2回なんですけれども、そもそもこの講座は12回やる予定で、去年室井尚さんと吉岡洋さんがテーマをずっと考えてこられました。ただ皆さんご存知のように室井さんが今年3月に亡くなられて、それでもこの対話はやっていこうということで開催することになったわけです。

本日の講座の流れですが、前回と同じように最初吉岡さんの話が約1時間あります。その後休憩を10分ほど挟んで、後半は約50分ぐらいになるでしょうか、質問タイムというか発言タイムの時間を設けたいと思います。それでは前回同様、オープニング映像から始めたいと思います。これは今年の3月12日に行ったプレ講座——全編はホームページで公開されています——から、今回のテーマである「人新世」<sup>じんしんせい</sup>に関わる部分を抜粋したものです。ではまずご視聴ください。



アートと哲学のための12の対話 —プレ講座（2023.3.12 銀閣寺爽庵カフェ）



<https://youtu.be/E1wqXQqNffo?t=463>

吉岡 今日ちょっとお天気悪いのに、たくさん来ていただきありがとうございます。先ほど安藤さんから、先月の第1回で話した内容はテキストとして全編公開されており、これからもそうしてゆくという話がありましたが、具体的にはどうやって作成しているかというですね、録音から機械で文字起こししたデータを、ぼくが見て直しているんですね。機械文字起こしのデータを触ったことのある方はお分かりでしょうが、人間の文字起こしとは違って、生の原稿は結構無茶苦茶です。忠実に校正しようとするれば、録画を再生して聴きながら直せばいいのですが、それではものすごい時間がかかってしまう。それで、ぼくは機械文字起こしのテキストだけを見ながらその場で考えながら直していきます。だから、出来上がってきたものはしゃべったことの正確なトラン

スクリプトではなくて、それに基づいた新しいテキストになってしまいますが、毎月作成してゆくには時間的にこの方法しかなく、それでいいと思うことにしました。だからここで直接聴かれた方は、自分が憶えていることと違うと思われる部分があるかもしれません。

機械で文字起こしできること自体はすごいと思いますけれども、今のところ意味が分かるのは3割以下だね。そのままではとても使い物にならないです。それを意味が分かるテキストにするのは、ChatGPTの出力を直すよりもはるかに手間がかかりますが、人間が文字起こしして、それを校正してゆく作業に比べれば、はるかに早くできますね。

さて今回は2回目ですが、前は最初の試みということもあって、室井さんがいないのにどうやって対話的な雰囲気を出すかということを考えて、これまで彼が書いてきたものから断片を拾って、それを読んでもらってぼくが反応するというにしました。最初のテーマであった「考える＝迷子になる」ということに関係するような箇所を、いくつかの著書からぼくがピックアップしてお配りしたのです。それで感想を聴くと、たしかに対話的にはなっていたが、室井さんが書いたテキストを吉岡さんが解説しているように聴こえた、もっとぼくが自由に話したほうがいいという意見がありました。それで今回はやり方を変えてみます。特にこの「人新世」というトピックに関しては、室井さんはこれまで明確に書いたり発言したりしたことはあまりないので、今回は彼の書いた文章ではなく、ぼくが昨年ある場所で話した原稿をお配りしました。それは室井さんとぼくが1980年代からずっと所属している、日本記号学会という学会の第42回大会で、昨年ぼくが発表した原稿です。

これは学会発表の原稿なので、文体も硬いし情報量も多くて難しいですけど、これをこれから全部説明するというわけではなくて、これをちょっと参考に見ながら、話のネタにしていこうかなということですね。さて「人新世」って最近よく聞きますねと言ってたけど、多分それほどでもないですね。「脱炭素」とか「SDGs」といった言葉は大々的にプロモーションされているけど、「人新世」っていうのはまあ、なんて言うかな、そのスジにちょっと関心のある人とか、(嫌いな言葉だけど)「意識高い」系とか、研究者の人は知ってるかもしれない。一般読者の多くが知ってるのは多分、斎藤幸平の『人新世の資本論』という本が大きいのではないかな。めちゃくちゃ売れましたからね。こんな分野の本なのに30万部とか。ぼくは別にこの本や著者自身を非難するつもりはないのですが、読んだときにどうしても気になったのは、「人新世」というのがまるで既存の事柄、誰もが当たり前で認めるべき事実であるかのようにしか書いてないんですね。まあ彼は地質学の専門家じゃないから、誰かが言っていることを前提して議論しているだろうけど、こうした本が広く読まれると、結果として、「人新世」と言われただけでそれが何か意味を持つと考える人が増えてゆくのは確かです。

そうすると「人新世」と言っただけで何かしら意味のあることをしているという雰囲気が広がる。その言葉を使うと、おさまりがいいんですね。「人新世の〇〇」みたいなタイトルを付けると新書が売れるし、「人新世における〇〇」みたいなシンポジウムを企画すると人が来るし、プロジェクトを企画すると予算がついたりするんですね。「人新世」とはそういう言葉なんです。だから、ぼくは「人新世」自体がどうこうというよりも、この言葉がそうした力を及ぼしているという事実をまず確認したい。たしかにこれは学術的な言葉で、だからすべての人が知ってるというわけじゃないけど、でもそういう言葉が広く受け入れられることによって、そこから地球温暖化への関心だとか、二酸化炭素やプラスチックの削減とか、ガソリン車はもう止めましょうとか、そういう特定の政治的な方向に引っ張られるようになるのです。

「人新世」とは科学の言葉です。今日問題にしたいのは、そもそも「科学」の言説、科学の言葉が、私たちの日常生活や一般社会でどういう風に使われ、私たちに影響を及ぼしているのか

ということです。さて「人新世」ですが、まずこれは地質学的な概念、地質年代の新しい呼び名なんですね。地球は約46億年前に出来て、その地球の中で先カンブリア代、古生代、中生代とか、気の遠くなるような長い地質年代があり、私たち今生きているのは、新生代第四期なんです。このものすごいスケール感というか、これを実感した上で「人新世」を考えなきゃいけないと思ったのが、この記号学会の研究発表の出発点ですね。

「人新世」というのは英語の「anthropocene」という言葉の翻訳語で、「anthropo-」というのは「人間の」という意味なんですね。まだ理科の教科書には出ていないと思います。約1万年前から現在までの時代の新しい呼び名で、これまでは「完新世 holocene」と言われてきたのですね。そもそも言い出したのは、オゾンホールの研究などでノーベル賞を取ったオランダ人の大気化学者パウル・クルツェンです。1万年前からということは、ほぼ私たち現生人類の文明時代と重なっているわけです。

たとえばこの地質年代の表を見ていただくと、右下に46億年まえの地球誕生があつて、だいぶ経ってから生命の時代が始まり、古生代、中生代とあつて、右上のごく薄い部分が新生代第四期、そのいちばん上に「完新世」とあります。これは2020年10月に日本地質学会が作成したもので、まあ最新版と考えていいと思います。ぼくが中学の理科や高校の地学で習った時には、最新の年代の呼び名がちょっと違って「洪積世」「沖積世」と習いました。日本語は漢字から受け取るイメージが豊かなので、何が積もった時代なんだろう？ と思っていましたが、これはノアの洪水による堆積物の時代という意味だったんですね。つまりユダヤ教やキリスト教の旧約聖書うに基づいているわけですが、戦後はそういう特定の宗教に関わる呼び名はよくないというので、更新世、完新世と名前が変わりました。でもぼくが習ったということは、日本ではしばらく古い呼び名が教科書にも残っていたということでしょうか。

さてこの表は、地球が生まれてから今までの約46億年を示すものです。ところが各年代が今からどれくらい前かを示す数字を見ると、地質時代の始まりは「4567」とかあるのに、いちばん最近の完新世の始まりを見ると「0.0117」とある。単位は100万年です。つまりこの表は対数的に表現されていて、現在に近いほど拡大されているのです。ちょっとどころの拡大じゃなく、数十万倍ですね。もし最近1万年くらいの比率に忠実に対応して作成すると、表の全体の長さは何キロにもなるのではないのでしょうか。それでは表が作れないから対数的に縮めて表現するわけですが、素朴にこの表を眺める人々の多くは、地球が経てきた時間の長さをこの表の通りにイメージしてしまいます。

美学的な観点から見るとこういうことは大事なんですね。私たちはパワポの画像が出力されるモニターやスクリーンの縦横比、4対3とか16対9とか、それから本のページの縦横の比率とか、そうした空間イメージの中で表現される自然界の姿に親しんでいるので、現実の世界もそれと同じように想像してしまいます。それは歪んだ自然観です。それを受け入れると、人類の文明活動の影響によって地球は今や新しい時代に突入したのだ、というような言い方に説得力を感じるかもしれませんが、46億年の中の最近1万年というのは、ほとんど無いに等しい、火花の一瞬の閃きのような時間で、あっという間に消滅するかもしれません。産業革命以降の250年がさらに短い一瞬であることはいうまでもありません。

地質時代の境界というのは、生物の大量絶滅によって特徴づけられます。地球上の生物種の大半が絶滅してしまうような変化が、これまで何度も起こっているのです。比較的最近の有名な例で言えば——最近といっても6千6百万年前ですが——白亜紀末の絶滅があります。これは直径10キロの隕石が今のメキシコ湾あたりに衝突したことによってもたらされたもので、その衝撃で地上は焼き尽くされ、その煙や活発化した火山活動の噴煙によって何千年の間太陽

の光が遮られました。そのために私たちが好きな巨大爬虫類、つまり恐竜が滅亡しましたが、恐竜だけではなく、全生物種の7割くらいが滅亡したと考えられています。私たちの先祖が、もちろん人間とは似ても似つかない姿をしていたのですが、そんなカタストロフを生き延びたと考えると感動的ですね。

こうした気の遠くなるような時間の比率を適切に表象するために、地球科学の学部講義などでよく使われる「地球カレンダー」というのがありますね。46億年まえの地球の誕生を元旦の午前0時とし、現在を1年後の同じ時刻と考える。すると、先ほどの恐竜たちが地上を闊歩していた白亜紀は、大体12月24日つまりクリスマスイブ頃になります。だからさっき「比較的最近」と言ったのです。でも25日のクリスマスの朝には、隕石が衝突して滅びてしまう。人類が登場するのは、やっと大晦日の朝10時頃（700万年前）です。私たちの直接の祖先であるホモサピエンスは、除夜の鐘が撞き始められる午後11時37分頃、農耕牧畜文明が始まるのは11時59分、産業革命は11時59分58秒です。つまり「人新世」というのは1年に換算した地球の歴史の中で、文明以降と見るなら1分前、化石燃料の利用による二酸化炭素の排出以降と見るなら2秒前に始まった出来事に過ぎないのです。

ぼくが「人新世なんてあるのか？」と問いかけているのは、そんなものはないと言いたいわけではなくて、あるとしてもこうした科学的に正しい時間スケールの中で考えてみようという提案なのです。「人新世」どころか、そもそも人類そのものが、生命の歴史の中では新参者も新参者、この間突然現れたような存在であって、人類文明はさらにはるかに短く、近代科学文明なんて本当に稲妻の光のように一瞬の出来事であると言えます。そんなものが今後、地球に何万年、何百万年というオーダーで影響を及ぼしていくとはとても想像できません。おそらくは現れたのと同じくらいの時間スケールで消滅すると考えるのが、理性的な思考ではないでしょうか。

人新世については、地球と太陽との関係に注目して考えるのもいいかもしれません。ぼくがこれまでずっと読んできたスピノザという哲学者がいます。彼が書きたいちばん有名なのが『エティカ』という本なのですが、その中にこんなことが書いてあるんですね。

Sic cum solem intuemur, eum ducentos circiter pedes a nobis distare imginamur, qui error in hac sola imaginatione non consistit; sed in eo, quod dum ipsum sic imaginamur, veram ejus distantiam et hujus imaginationis causam ignoramus. Nam tamesti postea cognoscamus eundem ultra 600 terrae diametros a nobis distare, ipsum nihilominus prope adesse imaginabimur; ...

Spinoza, *Ethica* Pars II, Prop XXXV 'Falsitas consistit in cognitionis privatione, quam ideale inadiquatae, sine multinatae et confusae, involvunt.', Scholium

太陽を見るとき我々は、太陽が我々から200フィート（60m）ほど離れたところにあるかのように想像する。この誤りは想像そのものの内ではなく、むしろ我々が太陽を想像する際、その真の距離とこの想像の原因を知らないことから来る。なぜなら、のちに太陽が地球の直径の600倍以上も我々から離れていると認識しても、我々は太陽を近くにあるものとして想像するだろうから。

スピノザ『エティカ』第二部 定理35「虚偽とは、十分でないあるいは損なわれた、混乱した観念が含む欠乏のことである」注解

地球の直径と太陽との距離の比は正確には600倍以上じゃなくて12,500倍なのですが、そんなことはこの際どうでもいいのです。それよりも重要なのは、私たち人間はたとえ正しい知識を与えられても、想像力、感覚は依然として誤り続けるということです。

例えば地球温暖化のことを考える時に、その地球は太陽からの熱エネルギーを受けて、それで全て動かしてるんですね。太陽は直径が140万キロで、地球は1万3千キロですから、100分の一以下です。それが太陽から1億5千万キロ離れた宇宙空間に浮かんでいるので、例えて言えば、太陽が直径35センチのスイカだとすると、地球はそこから39メートル離れたところに浮かんでいる、ブルーベリーくらいの粒です。それが太陽が発する5千万分の1くらいのエネルギーを受けて、それが地球を温めたり冷やしたりしながら、ほぼ地球上の生物活動の全てを支えているわけです。

地球は太陽から来るエネルギーをすべて吸収しているわけではなくて、どれくらい吸収するかは地球表面の状態、雲の量とか植生とか、陸地と水の比率とか、地軸の傾きであるとか、さまざまな要因によって変化しているわけです。その中に、たしかにCO<sup>2</sup>による影響もないことはないんです。ただそれがどれくらい大きいのか、決定的なのかについては様々な仮説があって、決まっていないのです。それを決定事項のように扱うのはおかしいです。決まっていないことを認めつつ考えるのが、科学的にもものを見る時に重要だと思います。

スケールのことをちゃんと考えなければいけないのは、宇宙のような大きな世界についてだけではなくて、逆に極小の世界についても同じです。感染防止のためにマスクを付けなさいと私たちは半ば強制されてきたので、マスクを付ければウィルスを吸い込まないですむと何となく考えています。けれどもウィルスの大きさは100ナノメートルくらいで、それを含む呼気のエアロゾルの直径は0.1から1マイクロメートルであるのに対し、不織布マスクの繊維の隙間は5マイクロメートルくらいです。もしもウィルスが蚊だとするとエアロゾルは蚊が入ったシャボン玉くらい、それに対してマスクは間隔が30センチある竹藪のようなものですね。もちろんマスクは自分が出す唾液の飛沫を防ぐ効果はありますから、まったく無意味というわけではありませんが。

なぜ「人新世」のようなことが話題になりやすいかというと、その背後には人間が文明の発達によって自然界に何か悪いことをしてるっていう罪悪感があるからではないかと思います。こういう罪悪感は近代西洋文明の基盤になっているキリスト教的な世界観に由来するものです。人間が科学技術文明の結果によって作り出したものは、本当は作ってはならないものだという意識です。神の領域領域を冒すものだからね。そういう無意識の不安は「フランケンシュタイン・コンプレックス」って呼ばれたりもします。これもこれまで室井さんと時々話してきたトピックですね。フランケンシュタインの怪物（一般に誤解されていますが、フランケンシュタインというのは製作した科学者の名前で、怪物には名前がない）を人間は作ってしまったが、それは本当は作ってはならないものなので、やがてそれに人間は復讐されるっていう物語。あの原作読んだ人はわかるように、フランケンシュタインの怪物は全然悪者じゃないのね。すごいやつというか、天使のような、幼子のような純粋な心を持った存在です。でも顔が醜いために差別される。怖いから石投げられて、人間がいじめた結果、人間を恨むようになる。当たり前だよ。100%人間のせいなんです。でも、自分が作り出した邪悪なものによってやがて人類は支配されたり滅ぼされたりするんじゃないだろうかというような恐れを「フランケンシュタイン・コンプレックス」って言います。

そういうカタストロフというか終末というか、一見恐ろしいみたいに思えるけど、実は私たちはそういう空想をするのが好きなのですね。地球最後の日とか、人類の終末とか、「シンギュラリティ」とかいうのもその一種だけど、そういうカタストロフについて考えるのがすごく好きなんです。

好きですか？と聞いたら「好きです」とは言わないだろうけど、客観的に見て、終末や危機を煽る本は売れるんです。映画や物語も人気があるんです。そういうことも、「人新世」がもてはやされる状況と、密接に関係があるということを言っておきたい。

時間があまりなくなってきたけど、ここでもう一つのトピックについても話しておきたいと思います。お渡ししたもう一つの資料ですが、2020年に京都市の「KYOTO STEAM」という、科学技術とアートとを融合させるという展覧会のパンフレットのために書いた短いテキストです。現在京都芸術センターにおられる安河内さんにお誘いいただいたものです。

アートとサイエンス、テクノロジーって言われると、ふつう思いつくのは、現代の高度な科学とテクノロジーにわれわれは囲まれているのだから、それをアート表現に生かすとか、科学やテクノロジーにかかわることをテーマにして作品を作るとか、そうしたことが多いと思うのですが、ぼくはアートとサイエンスの結びつきをもうちょっと深い、根本のところから考えてみたいと思ったのです。アートとサイエンスが共通に持っている出発点はなんだろうと思ったとき、それは私たちが直接感覚するという経験、直感を出発点にしてるってということではないかと思った。

これを書いたのは2020年だから、まさに新型コロナの騒動が社会的に大きな影響力を持っていきつつある時期でした。PCR検査を受けてワクチンを接種せよというプレッシャーが社会に拡大していった時期ですね。でもぼくは、コロナとか騒がれるずっと以前から、PCRの発見者であるキャリー・マリスって科学者にとっても関心があって、ファンだったんですね。ここに彼の書いた自伝がありますが、この本の表紙にサーフィンを持っている人がマリス博士です。アメリカ西海岸のサーファーなんですね。PCRというのは、ほとんどの生物の遺伝情報を担うDNAという物質を増幅させるテクノロジーです。20世紀の後半、遺伝情報を分子レベルで研究することがとても進歩したのですが、DNA分子はとても小さいので、たくさん存在しないと実験したり観測することができない。PCRはそのためにDNAを増やす画期的な方法だったのです。決して感染症を診断するための方法ではありません。

この本を読むと、マリスはPCRのアイデアを、ガールフレンドとドライブしている20分くらいの間に思いついたとか書いてありますね。面白い。まあ天才ですね。マリスは麻薬もやってたし女好きでも有名な人だったんですが、最初はこんな思いつきが本当に自分の画期的発見なのか自信がなかった。でも調べてみると誰も思いついてないし、実験してみると本当に有効だった。それで1993年にノーベル賞を受賞しました。どんな人物なのか知らない人も多いと思うので、ちょっと動画を見せます。TEDという有名なプレゼンの番組で喋っているところですね。YouTubeに公開されているので、全編はいつでも見ることができます。

彼はここで何を言ってるかっていうとね、サーフィンに行つて波を待ってる時に、17世紀の科学のことを書いた本を読んですの。イギリスのチャールズ2世の時代に、ロバート・ボイルという科学者がいた。高校の化学の時間に「ボイルの法則」というのを習った記憶がある人もおられるかもしれません。温度が一定なら気体の体積は圧力に反比例するという法則です。そのボイルが「真空」というものに関心を持ったのです。当時は、空気がどういう物質でどんな働きをしているかもハッキリとは分かっていなかったのですが、ボイルはポンプを使って透明な容器の中の空気を抜いてみるんです。ただ抜いただけでは何も見えないから、容器の中に鳥を入れておく。すると可哀想ですけど、ある段階で鳥が死んでしまうのです。それを、ボイルは真空という状態が実現されたと考えた。

ガラス容器の中で鳥が死ぬということは、否定できない感覚的事実です。ボイルはそれが、真空によるものだとして主張した。もちろん17世紀のポンプですから、そこで実現されたのは本当の真空ではなくて空気の薄い状態だったと思いますが、これが問題を引き起こした。というの、

キリスト教の世界観では神がこの世界を無から作ったのですから、真空、つまり何も無い空間というものはあってはならない。真空には神の力が及ばないことになるからです。だから真空は存在しない。それに対してボイルは、そんなこと言っただって目の前で鳥は死んでるじゃない、これは何？ 見えないの？ と言った。これが科学です。

それに対して現代に生きる私たちの多くにとって、科学とは専門的科学家たちが従事している特殊な活動で、彼らが何をしているのかは専門用語ばかりでよく分からないし、その成果は私たちの生活に重大な影響を及ぼすけれども、「こうだよ」と言われたら「あ、そうですか」と従うしかない、そういうものになっています。これは17世紀で言えば宗教的権威と同じですね。普通の人には手の届かないもの。

でもその科学が生まれた17世紀においては科学とは権威ではなくて、むしろ反対に、どこかで偉い人たちが勝手に正しいと決めていることに対して、私たちが直接自分の感覚によって経験する事柄をもとに考えるって言う活動だったということです。今でも本質的には科学はそういうものだと思うんですよ。ぼくが知っている優れた科学の研究者たちは、このことを絶対否定しません。本質的には科学というのは権威にとらわれず自由にものを考える活動ですから、その点ではと哲学と同じです。

けれども現実には、何か計測器が数値を出力するとそれが客観的なエビデンスになって、それがどんなふうに出力されたのか、その計測器がそもそもどんな仕組みで何をしているのかといったことは問われることがなく、そうして作られたなんらかのデータに従って行動することが「科学的」であるかのように言われます。その典型がPCRと言うものですね。コロナ真っ最中の頃、大学の授業で「PCR」って何の略称か知っている人？ と聞いても誰も知らないんです。あんなに騒がれて、みんなそのために右往左往させられているのに、その正体は何かということに誰も関心がない。これは科学的な態度ではありません。

PCRというのは「ポリメラーゼ連鎖反応」という言葉の頭文字で、ポリメラーゼという酵素を使って温度を上げたり下げたりすると、DNA分子の断片が2倍、4倍、8倍と増えていく反応のことなのです。同じDNA分子を大量に取得できるから、研究には非常に役に立つ。これがなかったら20世紀末以降の生命科学の発展はなかっただろうと言えるくらい、重要な技術です。けれどもこれは決して、感染症を診断するための技術ではない。発明者のマリス博士は、ノーベル賞を取ったのでさまざまな場所で講演しましたが、そのたびにPCRを感染症の診断に使ってはならない、そんなことをしたら大混乱になると警告していました。

マリスのこの本はだいぶ前に日本語に翻訳されていて、結構売れたと思うんですけど、彼自身は2019年、新型コロナ感染症が騒ぎになる直前に亡くなりました。陰謀論の人たちは暗殺されたとか言いますが、それは分かりません。ただ、もしも彼が生きていれば、現在私たちが置かれている状況について、大切な意見が聞けたらと思うと思います。

さて室井さんは人新世という話題から、そうだけれどもそうだよねという感じで、今哲学の世界で流行している「思弁的実在論」についても言っていました。結局は「カントの枠組み」だから、実はちっとも新しくない、と。「カントの枠組み」っていったい何のことなのかと思った人もいます。そこを少しだけ補足すると、カントの批判哲学は人間がこの世界を認識する条件は何かということ問い続けたのですが、少なくとも自然界に関しては、私たちは自分の経験の中に現れてくるものしか認識できないと言ったのです。当たり前のことのように思えるかもしれませんが、そんなことを言わなければならなかったということは、経験を越えた世界認識があると主張するのがメインストリームの思想だったということですね。今もそうですが、死後の世界とか、人間がついつい惹かれる超経験的な領域ですね。カントの同時代にもスウェーデンボリみたいな、



超能力を発揮する人がいたんです。スウェーデンボリはとても教養の豊かな科学者で人文学者であり、オカルトを売り物にするチンピラでは全然なかったのですけどね。でもロンドン滞在中にストックホルムの大火災をリアルタイムに透視したりしたんです。その頃はもちろんテレビもラジオもないし伝令も遅いから、彼の透視の後にニュースが入って、みんなが「おおっ」となった。でもカントからすれば、そんなのありえないわけ。

カントは確かに、自然的世界については経験の中に現れてくるものだけしか知り得ないと言ったのですが、経験の中に現れる現象が実在する宇宙の全てではなくて、感覚的経験の向こうにはそれを可能にしている「物自体」があると考えたんです。Ding an sich という概念ですね。近代合理主義のメインストリームは、カントのこの「物自体」は置いといて、とにかく経験できる世界がすべてだ、という方向に行きました。今の私たちの常識もそうで、突き詰めれば経験できる世界の外には何もないという考え方です。けれどもこういう世界観には根本的に不十分なところがあるので、何とかして経験を越えた実在、カントの「物自体」を思考の中に回復しようとしてきた。思弁的実在論と呼ばれている現代の哲学的ムーブメントもそのひとつです。そうした近代と反近代という思考のセットそのものを、室井さんは「カントの枠組み」と言ったのかな。

「新しいと言ってるけどちっとも新しくない」と彼が言うのは、そういう枠組みの中で動いているだけだから、という意味なのだと思います。しかしこの枠組みの外に出ることができるのかというと、西洋哲学の語彙で思考しているかぎり、ぼくは難しいと思う。と同時に「新しい」のは思想内容じゃなくて世代ではないかと思います。若者は常に新しいんです。客観的に見たら、若者が上の世代に反発するのはいつの時代も同じだから、その意味では新しくないけれど。でもぼくらだって1980年代には脱構築主義とかもポストモダンとか言って、新しい哲学を模索したけどやっぱり上の世代からは少しも新しくないとされていましたからね。なので室井さんはどうも分からないけど、ぼくは「新しい」かどうかということにはあまりこだわらないんです。

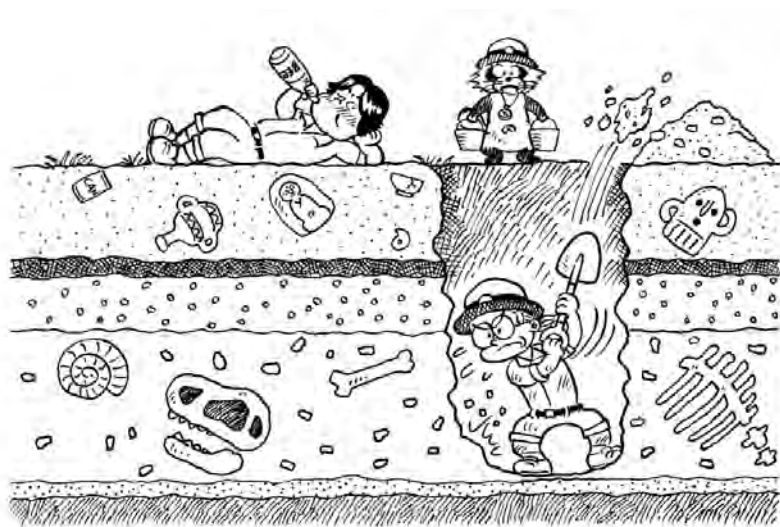
最後にもうひとつ、ここに持ってきた本を紹介したいのですが、これは中村方子さんという生物学者が書かれたミミズの研究についての本です。これまで「人新世」の話をする中で、私たちは地球や生物の歴史を考えるつもりでも、その時間・空間をきわめて人間化されたスケールで考えてしまうので正しいイメージを持ってないという話をしました。ぼくはもう20年前になる2003年にこの京都芸術センターを中心として、「京都ビエンナーレ2003」という総合芸術祭のディレクターをしたのですが、そのテーマとして掲げたのが「スローネス」でした。そこにこの中村方子先生をお招きしてシンポジウムをしたのです。

この方は1930年のお生まれで、ぼくの母と同じ歳なのです。この世代の女性で科学者として生きることがどんなに大変だったか、想像できると思います。今もそうですが、昔はもつと露骨に、科学は男の世界でしたからね。そして生物学の中でも、彼女が研究してきたのはミミズについてなのです。哲学は世の中の役に立たないが自然科学は役に立つから優遇されているのかというと、そんなことはありません。科学の中でもお金にならない研究は、人文学と同じように軽視されています。ミミズの研究が直接何の役に立つのか、お金になるのかは分かりませんね。けれども彼女はミミズがこの地球上で生きてきた悠久の時間に魅了されたのだと言います。だって私たち原生人類が生きてきた時間は高々20万年くらいでしょう。そんな短い、地球にとっては一瞬のような時間の中で、「人新世」だ何だと騒いでいるわけです。それに対してミミズの先祖が海から陸に上がったのは4億5千万年前だということです。これは地球の年齢の約10分の一で、たいしたものだと思います。そういう気の遠くなるような時間の間、ゆっくりと今の姿に進化してきたわけです。

ミミズの研究だけでなく、ミミズそのものもこの世界の中で何かの役に立っているのか。これは

重要な問いですね。中村先生は、「どうして地上には〈土〉があると思いますか?」と問いかけます。生物のいない太古の地球には土はなく、岩石だけでした。しかし植物が生まれ、その死骸が腐食して堆積する。そしてミミズのような地中の生き物が、微生物を食べて消化しウンチをする。そうして何億年もの間に次第に岩と石ばかりだった地表が少しずつ、ミミズの消化管を通して耕され、土が形成されてゆくのです。これは、人間がふつうの意味で役に立つとか立たないとか言っているスケールを遥かに越えた生命の大きな営みですが、その結果として人類は土という賜物を無償で手にして、農耕を行い文明を発展させてきたわけです。こういう途方もない「スローネス」について語るために、中村先生をお呼びしたわけです。

中村先生がミミズに関心を持たれたきっかけは、学生時代にチャールズ・ダーウィンの最晩年の著書『ミミズと土』(1881年)を読んだからだそうです。ミミズがいる土地の表面に石灰を撒いておくと、何年かしてその面が沈み込むことが観察できる。つまりその程度の時間でも、ミミズの糞がその上に堆積し土壌が形成されていることがわかるのです。そうした活動が何百万年という地質学的な時間スケールで続いていけば、大地の状態がすっかり変わってしまうことでしょう。ダーウィンといえば多くの人には「適者生存」とか「弱肉強食」のような言葉を連想するかもしれませんが、そういうのはダーウィンの思想を産業革命以降の人間の活動になぞらえた解釈(ダーウィニズム)であって、ダーウィン自身ははるかにスケールの大きな自然哲学者であったと思います。「人新世」は今のところあるともないとも断言できないと思いますが、ダーウィンや中村先生が教える、ミミズの働きがこの地球にもたらした影響を隣に置いてみるならば、まったく色褪せてしまうことは否定できないですね。



イラスト／谷本 研

---

## 参加者との対話

---

発言者A アートとサイエンスが「直感」から始まるということを聴きながら、なんとなく文化と経済みたいなことを考えていたのですが、直感が大事だということは、何らかの権威だとかマスメディアの情報を信じすぎることではなく、自分の直観で動く、そこから生まれる運動が社会を変えていききっかけになると、ぼくは受け取りました。そこで、たとえば市場調査の結果出てきた経済的判断であるとか、そういうものについてはどうお考えなのか聞きたいと思いました。

吉岡 市場調査の結果というのは、大多数の人が好んでいるのは何か、といったデータのことですか？

発言者A むしろ経営者の側から、マーケットのデータはこうなってますというのを見て、いくつかの選択肢がある場合、それを直観で選んでいく、みたいな……。

吉岡 もちろん、そういうことはあるでしょうね。ただ、ここで言葉に関して区別しておきたいのは、「チョッカン」といっても「直観」と「直感」という二つの概念があることです。「カン」の漢字が違いますね。ふつうはあまり区別しないで使われている場合もありますが、ここではちょっと注意しておきたいと思います。「直観 (intuition)」というのはデータに頼らず、いわば感覚を超えてなされる知覚のことです。「この人はウソをついていると直観した」というのは、その人がウソをついていると推論できる手がかり——表情がおかしいとか、言葉を濁しているとか——がないにもかかわらず、その人がウソをついていると分かる、という経験ですね。もしかすると、表情や言葉の微妙な変化を無意識に知覚しているのかもしれませんが、少なくとも判断する人はそのことに気づいていない場合です。

それに対して「直感」は、美学の語源であるギリシア語の「アイステシス」のことで、概念や理屈ではなく直接見たり聞いたり触ったりすることで、感覚に訴える知覚のことです。先ほどの例で、ガラス容器の中で鳥が死んでしまうのが見える、といったことですね。こんな明白なことでも「真空など存在しない」という宗教的ドグマに支配されていると、目の前で起こっていることが見えないこともあるのです。

いま出していただいた例で言えば、市場調査をして出てきたデータを前にして、複数の販売戦略の選択肢のどれかに決定すべき十分な情報が不足している場合、「これだ!」と決めるのは「直観」の方でしょうね。感覚的な手がかりがないのに判断する、ということだから。

それはともかく、今のご質問に関して面白いと思うのは、市場調査というのは一見、たくさんの人の感覚的な判断を統計的に示しているわけだから、つまりは多くの人の「直感」を代表している客観的な指標のように見えますよね。けれども実際には私たちの判断は、メディアによって大きく影響を受けます。市場調査はそうした影響の結果を示しているのです。そしてこのメディアは——テレビや新聞のようなマスメディアにせよ、多くの人が目にするいわばマスメディア的なネット情報にせよ——、実はきわめて少数の感覚印象を世界中の人々に拡散して影響を与える力を持っているのです。

たとえば、いま私たちの多くはプラスチックによる環境汚染ということを重大な問題だと思っていますが、そうした認識が広がるきっかけになったのは、2015年にコスタリカ沖で発見された

とされる、鼻の穴にストローが刺さったウミガメの動画ですね。たしかに痛々しいし、あれを見たら多くの人はプラスチックによる海洋汚染を深刻な問題だと、理屈抜きに信じるでしょう。ウミガメは——動物学的には知りませんが——多くの人にとって無垢で平和的な印象を与える生き物ですからね。もしもあれがウミガメではなく人喰いザメだったら、あれほどまでの同情は引き起こさなかっただろうと思います。ちなみに僕はあの動画を見た瞬間、痛々しいと感じると同時に、なんとなく変な気持ちになりました。それは、ウミガメは野生動物なのに、鼻にストローが刺さってしまうような、そんなどんくさい生き物だろうか、という疑問です。そのことを当時ある場所で言ったら、環境問題の発表をしている人にすごく怒られました（笑）。もちろんあれが意図的に作られた動画であると主張したいわけではなく、自分の「直観」を表明しただけなのに。せつかく環境問題への啓発的なイメージを見せているのに、それを疑ってはいけない、疑いを表明してもいけないという強張った雰囲気を感じました。

それはともかく、重要なのはそれがただ一つの例だということです。ストローの刺さったウミガメが世界中で1,000頭確認されたら、それは客観的な意味を持つデータになるでしょう。でもたった一つの感覚的印象でも、それがメディアを通じて全世界に拡散されれば、多くの人々の意見に影響を与えることができるのです。つまりメディアというのは、「直感」を用いて私たちをコントロールする絶大な力を持っているということです。

発言者A ありがとうございます。ちょっとぼくが思っていた「直観」と認識が違って、ぼくは自分の中に蓄積されてきた経験とかデータから、自分の行動を導く「解」が出てくるのを「直観」と考えていたのです。それに関して、アーティストや研究者と、まわりから得られるデータを元に判断するビジネスや経済界の人たちとの違いはどこにあるのかなと思ったのですが、今のお話を聞いて、直接得られるという意味の「直感」とは、少し認識がずれていたのかなと思いました。

吉岡 いや、経験やデータの蓄積から何かが出てくるという考え方は、別にずれているとは思いません。ただ「直観」というのは、客観化されたデータに基づいて計算するのではなく、そこには無意識的な側面、何らかの飛躍があるという意味が含まれていると思うのです。だからといって「直観」は何か神秘的な能力だとは考えていません。なぜなら、自分の中に蓄積された経験やデータは膨大で、人間はそれらをすべてコンピュータのように精査することはできないからです。人間が意識的にモニタできる自分の知識や経験は、ごく限られたものですよね。だから無意識的に獲得される「直観」には飛躍があるように思える。いわば自分は計算してないけど、身体全体はある種の計算をしているのかもしれない、そういうことです。

発言者B 「アートもサイエンスも原点は直感にある」というこの文章ですが、私は「権威」という言葉にちょっとひっかかったんです。この文章が載った美術展「STEAM」が企画されたとき、大学の授業にもそれが紹介されて私も少し疑問を持ったのですが、「権威」というのは時代によって移り変わりますよね、キリスト教会の権威とか、別の宗教の権威とか。先生がここで言われているのは、そうした複数の権威を想定されていたのか、それとも特定の権威を想定されて書かれたのか、それをお訊ねしたいと思います。

吉岡 この文章の中でキャリー・マリスが言及している権威というのは、明らかに特定の、つまり17世紀のイギリスにおけるキリスト教の権威です。もちろん現代においては、そうした権威はそのまま残っているわけではありませんが、ぼくが強調したいことは、権威の源が宗教であるか

科学であるかというのはあまり重要なことではない、人々が自分で見たり聞いたりしたことに基づいて考えるのではなくて、何らかの圧倒的な力によってみんなが同じ判断をしてしまうような、それを導く力のことを権威と考えるべきだということです。今はこの文章の中でのポイルの実験のようなことを、宗教的権威に対する科学的思考の勝利だと思う人が多いと思いますが、それは私たちが、ポイルの時代と同じ宗教的権威に支配されていないというだけのことです。その後も人間はやはり何らかの権威によって、目の前で起こっていることが見えなくなっている、見えているのに否認し続けるような状況があったと思います。

たとえば有名な例のひとつは、19世紀の半ばにウィーンで産婦人科の医師として活動していたセンメルweisというハンガリー人がいました。当時は今から見ると細菌とか消毒についての知識が不十分で、出産によって細菌に感染し産褥熱で亡くなる母親が少なくなかったのです。センメルweisは産婦人科の専門医と普通の助産師による出産とを比較して、医師によるよりも助産師による出産の方がはるかに産褥熱が発生する割合が低く、その原因を手洗いにあるのではないかと推論しました。しかし当時の医学の権威はそれを認めず、センメルweisは狂人扱いされて精神病院に入れられ、亡くなってしまいました。助産師と医師との間で、産婦の死亡率に明らかな違いがあったにもかかわらず、この時はそれが医学の、つまり科学の権威によって見えなくされてしまったのです。

発言者C 先ほど中村方子先生の話で触れられていましたが、ミミズはいわば、この地球で何億年も土を作ってきた、生き物として大ベテランですよ。人類はそれに比べて、高々数百万年くらいの新参者だとは思いますが、逆に言うとそんな新参者が、地球上を埋め尽くすほど広く分布したり、シアノバクテリアが作った酸化鉄とか、古生代の植物が太陽のエネルギーを蓄積して作った化石燃料とか、そうしたものを利用して繁栄した生物は過去にいなかったわけじゃないですか。山を崩して地形を変化させたり、地球カレンダーでたかだか2分程度しかない現生人類が、ここまで地質に対して大きな影響を与えているということを考えると、「人新世」という考え方も妥当なのではないかな、と思います。時間的スケールが小さいというのはその通りなのですが、逆にこんな小さなスケールにおいて劇的な影響を及ぼしているというのが人類の特別な点だとも思うのですが、どうお考えでしょうか。

吉岡 たしかに、ミミズのような他の生き物が自分の生活を通じてゆっくりともたらしてきた変化に比べて、人類の文明が地球に対して与えている変化が急激に思えることはたしかだと思います。でもミミズが地表にもたらした変化と、人類のそれとを比較してみて、ミミズは何億年もかかって土壌を耕してくれて素晴らしい！と私たちが思うとすれば、それは私たちが農業を行うからなのです。つまり人間の都合でミミズを評価しているというか。私たちは基本、自分のスケールでしか自然を見ていない。たしかに太古の海の中でシアノバクテリアが活動して、金属の酸化という現象も始まったのですが、酸素で呼吸をしている私たちからみれば、やっと酸素が出来てよかったと思うかもしれないけど、酸素ってそれが存在しない環境に適応していた生き物にとっては猛毒なのですよ。彼らにとっては大気中に酸素が増えたりするのはとんでもない環境破壊だと思います。酸素によって大量絶滅が起こった。ぼくらは今、二酸化炭素が増えることが環境破壊の要因だと思っているけど、それは人間中心の、その中でもかなり偏った見方だと思います。

でも今言っていたポイントはとても重要で、たしかに人間である自分の視点から見ると、地球史のこんな最近の、一瞬のような出来事の中でかつてあり得なかったような特別なことが

起きているようにも思えるし、でもそれはやはり自分が人間でこんな小さな時間スケールでしか考えられないがゆえに、人類の存在が地球史の中で特別なもののように見えるだけなのか、それは正直ぼくには分からないのです。断定せず、分からないままにしているのです。

発言者D 人新世の話を聴きながら、以前室井さんが言っていたことを思い出したのは、「君たち歴史家は百年単位で考えているかもしれないけど、ぼくら哲学者は千年単位で考えている」と。地質学者とかと話していると「比叡山なんて最近できた山」とか言わはるしね。ぼくは「人新世」というのは一種のフィクションというか、思考実験みたいな面もあったのではないかなと思うんです。こんなふうを考えてみたらどうかな、みたいな。提唱したクヌッツェン自身は、オゾンホールが地球環境に与える影響を研究してノーベル賞をとった人ですよ。

今回資料として配られた「人新世の記号論」は、去年の日本記号学会で吉岡さんが発表されたものですが、ぼくはその翌日に「人新世の風景」という発表をしなさいと振られていたのに、その前日に吉岡さんはこんな話をする……（笑）。

吉岡 いや、それはけっして嫌味じゃなくて、学会を盛り上げようと思って……（笑）。

発言者D 正直、それまでぼくは人新世にあまり興味なかったのですが、調べてみるとわりと面白いなと思った。地質年代の名前というのは、それが発掘された場所にちなんで命名されたりするんですよ。「チバニアン」とか。「アキタニアン」は秋田かと思ったら、フランスのアキテーヌ地方だったり。人新世というのはまあ言ってみたら、遠い未来の誰かがその地層を発掘した時に、妙なものが出てくる、つまり人間が作ったプラスチックとか、精製された金属とか、そういう地層のことを未来の誰かが「人新世」と名づけるかもしれない。そういう思考実験として考えれば面白いのではないかと思います。そもそも人間は文明に対して「自然」というものがあるかのように思ってるけど、その「自然」そのものが人間が作った概念を宇宙に押し付けてるだけなのではないか、と。そういうふうにと考えると、「人新世」も捨てたものではないかな、とも思います。

たしかに、SDGsと一緒にいろんなところで便利に使われている、脅迫的に使われているというのは分かるのですが、考え方それ自体としては面白いところもあるのではないかと思います、どうでしょう。

吉岡 面白いと思いますよ。すぐれた科学者というのはこういう、ちょっとユーモアというか、人々の思考を刺激するようなアイデアを提示するのが好きだと思うし、クヌッツェンの人新世というアイデアもそういうものだと思う。でもぼくが問題にしたいのはそうした科学者のウィットが、今世間で騒がれている「人新世」という言葉にはみられないということなんです。人新世は、脱炭素とかSDGsみたいな政策を推進するための、学問的根拠のように語られる。もしも今、誰もクヌッツェンのアイデアをかえりみななかったら、ぼくはたぶん「人新世というものがあってね」と宣伝すると思う。ぼくが今人新世を話題にする動機は何かというと、それが元々の意図とは違って、ユーモアを失ってクソ真面目に扱われ、特定の方向に政治的に利用されているからなんです。そしてそれは仮説であるのに、まるで既存の事実のように語られる。

発言者D そうですね、地質学者に「人新世」と言ったらゲラゲラ笑われたので、少なくとも地質学者の間では既存の事実ではまったくないと思います。

もうひとつ今日の話でぼくが面白いと思ったのは、終末論についてです。どうしてぼくたちはこん

なに終末論が好きなのか。ユダヤ・キリスト教的とか言われるけど、アポカリプスとか、世界の終わりとか、ほとんどエンタテインメントと化しているようにも思うのですが、その辺りはどう思いますか？ たとえば昔『渚にて』というSF小説が有名だったけど、あれは核戦争後に唯一汚染されていないオーストラリアに潜水艦で逃げるといような話だった。それだけじゃなく、地球の絶滅とか異星人の襲来、『幼年期の終わり』とか。そういう文脈で「人新世」を考えてみるとどうなるのか。かつて「ハルマゲドン」というのもありましたが、広い意味での宗教的終末論との関係で考えてみるとどうでしょう。

吉岡 終末論ね。うん、たしかに世界の終末という物語が拡散する理由は、世界は終わるからこそ正しく生きて天国に生まれ変わらなさい、みたいな教訓的な面もあったと思うけど、それよりも世界の終末というビジョンそのものに、多くの人がワクワクするからではないかと思う。世界の終わりを想像するだけで、たぶん脳に快樂物質が分泌されるのではないかな（笑）。もちろん表面的には怖いと思ってるんですけどね。宗教的な終末論もそうだと思うけど、特に20世紀以降の終末論の流行はメディアの発達とも密接に関係していると思う。たとえばハレー彗星の到来は、いちばん最近の1986年はそんなに騒がれなかったけど、その前の1910年は記録を見ると、地球最後の日だ！ みたいに世界中大騒ぎだった。それでみんな怖がってるんだけど、なんか楽しそうでもあるんですね。

発言者D ぼくはノストラダムス世代ですからね。1999年に32歳なんです。ああ自分は32歳で終わりなのか、と（笑）。

吉岡 そうそう、20世紀の終わりも大騒ぎだった。未来は永遠の進歩で素晴らしい、という本よりも、もうすぐ世界は終わると予言する本の方が、絶対たくさん売れていると思いますよ。ぼくが若い頃に流行ったのは「41歳寿命説」だったかな、昭和30年代に生まれた人は食品添加物とか環境汚染の影響で、平均寿命が41歳になるという。それが流行った時ぼくは30歳半ばだったから、ああーしょせんあと数年の命かと、同年代の同僚と飲み会のネタになってました。

ネヴィル・シュートの『渚にて』に描かれた終末イメージはたしかに強烈でしたね。核戦争で北半球の人間がほぼ絶滅し、生存者がいるはずのないシアトルあたりから電信の信号が送られてくるので、原子力潜水艦で救助に向かうのですが、人間はおらず、カーテンに結び付けられたコココーラの瓶が風に揺れて電信機のキーを押しているだけだったと。

発言者E 終末論がどうしてそんなに盛り上がるのかな、ということを考えていたのです。私は最近、身内を何人か亡くしたのですが、人間は孤独死への恐怖、自分だけが死ぬということへの恐怖を持っているので、かえって人類全員が死ぬというビジョンへの憧れというか、安心感のようなものがあるのではないかと。私の叔父に当たる人が亡くなる前に、みんなに念仏を唱えさせて、みんなで一緒に行こう、みたいなことを言ったんです。気丈で社交的な人だったんですけど、自分の死を前にしてどういう気持ちになったのだらうと思い出しました。

それからこれは先生にお聞きしたいのですが、それはSDGsのことで、私は今ある企業で働いているのですが、「ある日突然、SDGsがやってきた」みたいな印象なんです。するともう、会社としてこれはやらなきゃいけない、14の目標のこれとこれをうちはやります、みたいな方針が上から降りてくるんですね。もう既存の、絶対的な目標として。企業がそれに従わないと存続できないというのはまあ理解できるんですけど、それを個人的な目標にまで落とされてくるのは気

持ちが悪いと感じています。それまでも環境のことを考えて生活していた人もいたし、そんなことは全然気にせずに生きていた人もいるのに、それを全部上から大きな力によって、個人的な「直感」までSDGsの中に組み込まれていくみたいなのが、非常に気持ちが悪いと感じます。

でも一方で、そういう大きな力に組み込まれて全部が決められたら楽というか、安心するとう側面も否定できないのです。なので、個人としてそういう流れにどう抵抗したらいいのか、いや必ずしも抵抗というわけでもないのですが、どう向き合っていけばいいのかをお訊きしたいと思います。

吉岡 この哲学対話シリーズのそもそもの趣旨、室井さんが考えた「考える＝迷子になる」という趣旨からすると、今言われたSDGsに限らず、ある日突然上から目標が降ってくる、ゴールがまず与えられるという状況は、言い換えれば迷うことを許さない、つまり考えることを禁止しているということですね。

けれども会社とか学校とか組織としては、それに従わないと営業できなかつたり補助金が下りなかつたりいろんな不都合がある。だからシニカルな距離を取りつつ、表向きは従っていることにしておく。それは仕方がないし、健全な態度だと思います。でも問題は、やっているうちに距離がなくなっていく、いつの間にかその「目標」が個人の内面にまで侵入してくることです。特に、子供に対して最初から目標を設定してはいけないと思います。子供はその目標から距離を取れないからです。小学校に至るまで、ある日突然上から目標が設定されるという状況には危険を感じます。別に、その目標が間違っていると主張したいのではありません。SDGsのゴールのひとつひとつは、世界から貧困を無くそうとか、誰も反対できない「いい事」なんですよ。キレイ事ではあるけど、キレイ事を言うこと自体が悪いわけではない。理想は、半分茶化したりしながらも捨てない、というのがバランスの取れた態度だと思います。さっきのウミガメの話じゃないけど、理想を茶化すこと自体を禁じる世界は恐ろしいです。

どうして理想を茶化すことも大事かという、世界は私たちが思っているほど単純には理解できないからです。プラスチックを分別回収すれば再利用できるからそれだけ環境は良くなると何となく思われているけど、生ゴミの中にプラスチックが混じっていた方がゴミは高い温度で燃焼するから効率はいいんです。分別すると生ゴミの燃焼に余計な燃料が要るようになる。リサイクルといっても、要らなくなったプラごみを全部溶かしてまた新しいプラスチック製品ができるかのように多くの人は想像するけど、リサイクルするとプラスチックの品質は落ちます。高品質のリサイクル製品を作ろうとするとそのためにまたエネルギーが要る。生分解性のプラスチックなら燃やさなくていいから二酸化炭素が出ないかという、自然分解される過程でやはり二酸化炭素は発生します。というふうに、すべてによし悪しがあって、プラスチックを減らせばエコだ、という単純な話ではない。

発言者F 私はこれまで先生のお話を十年くらい聴いてきたのですが、昔「複雑系」が話題になった時も、科学的な意味から外れてコマーシャルに利用された。「人新世」もマスメディアを通じて広がることで元の意味が失われていると思うのですが、広がることによってコモンズというか、多くの人に共有されるようにはなると思います。と同時にその背後に権威があるということには息苦しさをを感じる。コモンズというか集合知的なものと、権威との関係について聞きたいのですが、たとえば神社や鎮守の森といったものも、昔はそれによって自然の開発をある程度抑制するコモンズ的な知識として役立っていたのが、近代に入ると戦争のために神社は国家的な権威を表象する装置として利用されるようになりました。「人新世」に伴っている科学の権威については、



現代では「科学」と言わないと人は納得しないという状況に私は息苦しさを感じていて、そうした権威なしに知識を共有することできないのだろうか、と。

吉岡 コモンズと権威……どう答えたらいいかな。権威ということでもまず答えるなら、権威のあり方が昔と今では違って来たというふうに考えますね。先日もだいまりこさんのやっている「未来に残したい授業」というYouTubeの番組で「失敗原論 ⑦」を公開して、その中でこんな話をしたんです。昔は先生の権威とか父親の権威という、有無を言わずこれに従え！という形で押し付けられて、従わないと怒られたりポカッと殴られたりした。これは一見厳しいようですが、子供にとってはまだ逃げ道があるんです。うまく騙して切り抜けて、ペロッと舌出していることもできた。でも司会者のだいさんに聞くと、今の小学生は別に怒らなくても、自分から宿題は絶対やらなきゃいけないと思っている。権威が内面化されているのです。どうしてそうなったのかと考えると、それは先生や親が表面的には優しくなったからではないかと思います。激しく怒ったり体罰を加えたりすると、今はハラスメントとか虐待とか言われるので、そういう目に見える暴力の代わりに「宿題やってくれないと先生は悲しいな」みたいな言い方をします。これは一見、対等で権威を振りかざしてないようにみえるけど、本当は非常に深い暴力です。これは、お前は先生や親を悲しませるようなことをしているのだぞ、ということで、だから「義務とその背後にある権威を内面化せよ」というメッセージだからです。

現代のSDGsのようなものの権威も、これに近いなという感じがします。つまりそれは、科学的根拠に基づいた目標だから従え！というような、目に見える強制力として迫ってくるのではなくて、一見口あたりがよくて優しい、誰もが反対できないような基準として提示される。けれどもそれに従わないと、明らかに自分が不利になったり排除されたりするような現実が伴っているのです。だから昔の権威のように単純に反抗できない。「みんなやってるんだから、やりましょうよ」みたいな感じの同調圧力として来るのです。深い意味では、これは権威を内面化せよという強制です。もしそれを「コモンズ」と呼んでいるのだとすれば、コモンズなんてクソ喰らえだとはぼくは思う(笑)。むしろ、そうした強制にはみんな抵抗しなければいけないという意識がコモンズであるべきだと思います。

現代は昔ほど社会が暴力的でなくなったと感じる人が多いと思うけど、ようするに問題は、暴力が見えなくなったということなのです。あんまりケンカもしない。対立があっても、それはケンカじゃなくすぐに炎上とか、事件とか訴訟になってしまう。相手を強制するような力を持つ発言をしても、表面的には「私はキツイことは何も言ってないでしょ、暴力も振るってないでしょ」と言い訳ができる。ちなみに、室井さんはその反対でした。時々、相手を傷つけるようなことをストレートに言う人だった。本当に傷つく人もいたわけですが、そうでありながら彼のことを優しいと感じる人が多かったのは、彼が人に対して、見えない暴力や内面化の強制を絶対にしなかったからだだと思います。

発言者G プレトークの映像の中で、人新世に代表されるような環境意識を室井さんが「結局は人間中心主義だ」と言っていましたが、それでは「脱人間中心主義」ということをエコロジーの文脈や人新世について語る際——私は芸術の文脈でそれをしているのですが——、それはアニミズムに戻っているのではないかという批判もあります。でも私はそれはそれで、人間中心主義を脱しようという試みのひとつとしてありだと思っただけです。そもそも人間が、人間中心主義的ではないような世界観なんて持てるのでしょうか？

吉岡 持てないと思います。人間中心主義と脱人間中心主義とはセットで、このセットから人間は脱することはできませんが、それは人間的認識の基本的な限界で、別にそれでいいのだと思う。ただこの限界を知ることで、狭い意味での人間中心主義からは自由になれるかもしれない。でも人間の身体の中にいるかぎり、人間中心の認識の枠組みがどういうものか、見えないじゃないですか。たしかに、生きたままネコに転生することができたら人間とはどういう存在なのか、外から見えるのかもしれない。もちろんそんなことはできないのだけど、それにちよつと近いことが可能になるのが、芸術の文脈だと思う。想像力の中では、ネコだけでなくいろんなものに転生可能だからね。つまり科学のように対象とカッチリ組むのではなく、いわば世界とユルく関わっている状態、言い換えれば「いかにして人間中心主義から脱するべきか」とクソ真面目に悩むのではなく、気がついたら一瞬ネコになっていたかも、みたいな状態かな。

発言者H 本日お聞きしたスケールの話、地球カレンダーの中では人類の活動が一瞬のような時間しか占めていないことや、地球の大きさからしたらいちばん高い8,000メートルのエベレストだつてたいした起伏ではないと思いますが、「人新世」ということで言うと、80億人の全人類の中で、地球環境に影響を与えている人はそのごく一部ではないかと考えるのですが、どうでしょう？

吉岡 それはそうだと思います。ただ生きているだけでも、その人がどんな国のどんな階層に属するかによって、消費する資源やエネルギーの量、環境に与える負荷の量は何百倍、何千倍というスケールで異なります。人新世を語る時にも、それは全ての人間にとって同じ意味を持つわけではない。「人間」という言葉でそうした差異が隠されてしまうという指摘はその通りだと思います。

2023年6月11日(日) 於：京都芸術センター「大広間」